

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 111 号

平成 23 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より (2)  
(歴史編の著者は、藤田昌直小石川白山教会牧師)

クリ・デュ・クール (Cri du Coeur) 心の叫び

さて、1941 年 (昭和 16 年) になると世界情勢は、一層、悪化の一途をたどった。2 月頃には、宣教師の引き上げも開始されるようになった。わがミス・スザン・バーンファインドも帰国することになり、3 月 23 日送別礼拝を行なった。...

12 月 8 日未明、日本軍のハワイ真珠湾軍港の急襲とともに米英に対し宣戦を布告した。ドイツ・イタリーの全体主義国を枢軸とするヨーロッパ戦争は、今や世界の戦争となった。...

米国英国の宣教師の教会における公の活動は、ここで全く停止状態にならざるを得なくなった。この時、小石川白山の宣教師館には、ミス・モーク、ミス・シュワイツァー、ミス・ロイス・クレマーの 3 人がいた。広野と筆者は、所轄警察・富坂警察の特別高等警察に会う。佐藤特高はこんなことを言った「宣教師に関しては防諜に注意すれば今まで通りでよし。ただし府外に旅行はできない。交際はしてもよい。電話も今のところあってもよし。」つぎに付け加えて「心配しないで と申しつたえてほしい」といった。あとで聞くと富坂警察はすこぶる紳士的だったようである。

教会と同じ構内の宣教師なのでこちらから訪問するのに何のさしつかえもなかった。しかしながら 3 人の宣教師は、全く、軟禁状態となった。そして訪れる人も、次第に少なくなっていった。ミス・モークも、日曜礼拝に出席できなくなった。これは、ミス・モークにとっては、全くの苦痛であった。ミス・モークの得意とする、個人から個人への伝道もできなくなってしまった。遣わされたところにとどまりながら、その世界との間に遮断機がおりてしまったのである。見えない壁ができて、沈黙を余儀なくされるに至った。しかし、こういうとき、3 人の聖女たちは「これで楽になった」などと考えなかった。彼らはそこで仕事をしていた。すなわち彼らは「クリ・デュ・クール」(心の叫び)を神に向かって挙げていたのである。われわれは、それを祈りと呼んでいる。白山にいた 3 人の聖女たちは、これからの長い格子なき牢獄の生活の中で、ひたすら祈りに励むことを誓い合っていた。彼女たちは、それぞれ、愛する霊の子供たちをもっていた。...

### 暗い大地の中に隠されて

1942 年(昭和 17 年)...6 月には、東洋宣教会・ホーリネス教会系の諸教会に対して弾圧が起った。幹部教職百数十名がいっせいに検挙された。

8 月 29 日(土) この日突然、3 人の宣教師は住居から離れることになったとの通知が富阪警察からあった。

9 月 16 日(水) 富阪警察の特高、大森部長、大橋外事課員がきた。「このかたがたは、今日、ここを出ます。」...ミス・モーク等は、もう米国への最後の船はとっくの昔に終わっているが、また特別のはからいで本国送還がなされるものと思っていた。従って、暑い赤道直下を通して、遠まわりしてアメリカに帰るのだからというわけで、みな夏の服装で、ほんの手さげかばんを一個ずつ手に持つ有様であった。...

ところが、翌・9 月 17 日の朝、警視庁から筆者のところへ電話がかかって来た。「あなたのところから来た 3 人は、冬着もなければ夜

具もない、すぐ持ってきてもらいたい、ところは田園調布スミレ学園。これは他の人にってはこまる」という突然の電話である。いうまでもなく 3 人の宣教師は本国送還ではなく抑留所に入れられたのであった。これから長い戦争を日本の戦時抑留所に過ごすのである。スミレ学園はカトリックのものであったが徴用されていた。

### 戦時下の花々 隠れた祈りによって

1943 年（昭和 18 年）9 月 15 日には、戦時第 2 回交換船が日本の港を出た。これには P・S・メーヤー博士等が乗船した。ミス・シュワイツァーも一緒であった。ドクター・メーヤーは、早くアメリカに帰って日本のために尽くすのがよい道であると考えた。ミス・モーク、ミス・クレーマーは終りまでとどまるのがよいと考えた。ミス・シュワイツァーの健康では、これからの抑留所生活は難しいから、ミス・シュヴァイツァーは乗船した方がよいのだと、ある日、抑留所を訪問した筆者に、ミス・モークが語ったことを覚えている。

### 神の前にはただ塵と灰とが残る

1945 年（昭和 20 年）...いよいよ 3 月 10 日（土）前夜 11 時頃より約 30 機（注 正しくは約 500 機）の B 2 9 は都心に来襲、非常な強風下の爆撃で大火災が起こった。...翌日にはだんだん被害がわかってきた。本所・深川はほとんど全滅し、本所緑星教会も全焼、広野捨二郎父子行方不明、牧師父子以外に、この時本所緑星教会会員が 18 名爆死した。

5 月 20 日（日）本所緑星教会広野牧師及び同教会戦災死者のために合同葬儀を執行した。場所は小石川白山教会において。空襲下の東京であったが、来会者約 100 名。...

8 月 15 日正午、天皇は終戦の詔勅を放送した。ポツダム宣言受諾である。筆者はこの放送を石館邸で暑い太陽の照りつける中で首うなだれて聞いた。

8 月 17 日、石館守三、藤田昌直両人は、この日、ミス・モークについて語り合った。「終戦だからミス・モークも抑留所から解放される筈である。先生を迎えたい。今日、対米感情は極度に悪いが、

藤田は教会の牧師として先生を迎えたい。日本人信者のところで迎えられることは先生も喜ばれるのではないか」という藤田の意見に、石館は全面的賛成をした。そして石館は「日米の間に先生のような人が立ってこそ、双方の誤解が氷解し「いやし」が与えられるというものである。申し上げにくいことだが、あと1年、日本で辛抱していただけないだろうか。牧師が先生を迎えるというのであれば、自分は自分の家を提供し、出来るだけの後援をしたい。周辺の人がアメリカ人を迎えた、と行ってかれこれいっても、私の信念において、あなたのところへ来るミス・モークを私もまた迎える」と言った。このことは当時の私の日記にくわしく記されている。当時は、アメリカ人教師を家庭に迎えるというのに、こんな覚悟を必要としていたのである。今日ではとても考えられないことであった。また、1934年以來、ついにファローの年にもアメリカへ帰れず、また1942年9月以來、抑留所にいた人、そして、今直ぐアメリカに帰れば王者の如く迎えられるその人に、なお1年敗戦下の物資窮乏の日本にとどまってほしいと願うことは、情としてしのびがたいものがあった。これも、今日では到底考えられぬことである。しかし、石館と藤田の二人は、すでに話し合ったところによって行動することにした。

### 抑留所のスリル

1945年(昭和20年)8月17日、東京帝国大学医学部薬学科の教授室に石館守三教授を訪ね、食事を共にし、それより警視庁におもむく。警視庁はゴツタがえしていた。書類焼却の煙がみちていた。米軍の厚木進駐が目前であった。中野外事係長にあって、ミス・モークへの面会許可を求めた。

中野外事係長は口数の少ない人で、初めのうちは「面会などできない。親か子供でもなければ」と、とりつくすべもないような対応であったが、いろいろ話しかけているうちに、次第に糸口がほぐれて来た。同係長の気分がうちとけてきて、次のような物語をするまでになった。その物語りによって抑留所中の、ミス・モークの生活

の一端を知ることができた。

「わたしたちの頭は 180 度の切り換えをしなくてはならなくなりました。それは政治情勢のためもあります。が、それだけではありません。わたしたちは、あのミス・モークたちの信仰と生活にたいへんな感化を受けました。あの人たちに会っていると、自分の馬鹿がわかります。自分の頭がいかにシンプルかを教えられます。

あの空襲が次第にはげしくなろうとするとき、防空壕を掘り始めると、モークさんがいうのです。

「誰のための防空壕ですか」と。

「あなたがたのためですよ」と答えると、

「『少なくとも、わたしのためなら必要ありません。わたしは、毎夜、あの雨のように降る爆弾を見ていると生命の縮まるようなせつなさを感じます。あれは日本の人たちの上に降り、あの下でみなさんが苦しみ、ことに幼い子供たちも死ぬのかと思うと、あの爆弾が自分の上に落ちてくるようにと祈っているのです。そうすればその一つ分だけでも他の人たちが助かります。そういうわけですから、防空壕はわたしにはいらぬのです』というのです」

係長の話はまだ続く。だんだん雄弁になった。

「私が頭の切りかえをしなくてはならないというのはこの点ですよ。われわれの誰ひとりとして『あの爆弾が自分の上に落ちてくるように』と祈った人はいないでしょう。どうぞ自分の所には落ちないように』と祈る人はあったでしょう。『少しそれて隣の家でよかった』とは思ったでしょう。『自分の家はしまいまで助かるように』とは祈るでしょう。ミス・モークという人は偉い人です。コペルニカス的頭の切りかえをしなくてはならないと思うのはこういうわけです。」

警視庁の真只中で、この話を聞いたとき、わたしたちも深い感銘にうたれて、ミス・モークはそうであったのか。ミス・モークらしい と思った。日本人と一緒に苦しもうと思って日本にとどまった人、神許し給うのなら日本人と一緒に死ぬのだと覚悟をきめて日本にとどまった人なのだ。

中野係長は、自分で語っているうちに、面会許可は当然のことと思うようになったであろう。

「どうぞ、いってあげて下さい。あなたがたのいわれるとおり、今の日本にあのような美しい人がいてほしいのです。破れはてた日本なのですから、もう 1 年日本にいていただけるように、どうぞたのんでみて下さい。」ということになった。

ミス・モークは目白の聖母病院の中の修道女たちのいたところに、空襲下を過ごしていたのである。

抑留所に最後までとどまっていた宣教師たちは主として婦人宣教師であった。スミレ学園から関口台町の修道院へ、そして目白・聖母病院のある修道院へと、これらの婦人宣教師たちは、空襲と戦災にあいつつ移動した。

石館と藤田とは、警視庁から直ちに目白の聖母病院へ行った。正式面会をした。この日は、主として石館が語った。

「なお 1 年、日本にとどまっていたきたいとお願いすることは、まことに礼を失し苛酷な願いであることをよく承知しますがご考慮をお願いしたい」

という趣旨であった。

ミス・モークは次のようなことをいわれた。

「私も祈っていました。神の御旨は何であるかを知ろうとしてです。あなたがたがここに見えたのは、とどまれという神の御旨と信じます。今まで迷っていたことは二つの点からでした。一つはわたしがとどまることがあなたがたの重荷になりはしないかということ。第 2 はわたしの生死を気にしている在米の人に一度あってみたいということでした。しかし、こういうときは、自分のことは第 3、第 4 のことです。とどまります。」

ミス・モークは広野の死を知っていた。彼女のやつれはひどかった。...

8 月 22 日。ミス・モークは、長い抑留所生活から解放される日である。筆者は聖母病院へ一人で迎えに行った。ミス・クレマーは

米軍の飛行機に乗って他の宣教師たちと一緒に帰国するのだが、眼にいっぱい涙をためて

「さよなら」

といった。ミス・クレーマーはこうして帰国して、すぐ、ミス・バーンファインドにもあって日本の実情を報告した。...

ミス・モークは8月22日、徒歩と電車で石館邸へ帰ってきた。自動車などというものは、もちろんたのめる状況でなかった。全くすし詰めの中電の中で人々の目はミス・モークに注がれた。未だ対米感情の興奮している時である。筆者はミス・モークをかばうようにして立っていた。石館邸では石館守三、夫人光子、筆者の妻藤田沢子らが玄関に出て迎えた。

ミス・モークはほとんど何ももっていない。薄いヨレヨレの夏のワンピース、小さな手さげ一つ。

「こんなになって帰ってきましたよ」

とほほえんで玄関にはいられたときには、みんなジーンと胸に應えるものがあつた。

8月26日の日曜は、会員たちが聞き伝えて、みんな嬉しそうに再会を喜んだ。それでも未だ14人の集会であつた。

ミス・モークにもっと楽な方法で生活していただく途があると申出る人もあつたが、ミス・モークは

「教会に仕えることがわたしの使命です。牧師を助けるのが宣教師のあり方です」

といて、どのようなよい条件にも頑として、まさに頑として応じないで、昔ながらの困難な途を歩いた。その当時のことだからもしミス・モークが欲するならば、日本政府でもアメリカ軍でも、ミス・モークをもっと優遇する途を開いたであろう。しかし、教会を離れてのミス・モークというものは考えられなかつた。それがミス・モーク・スピリットというものであつた。教会を離れないということは、キリストと離れないことでもある。

9月2日、ミズーリ艦上で、日本は降伏文書に調印、9月10日米

軍は進駐。

## 紺碧の海潮

1945年（昭和20年）8月22日にミス・モークは石館邸に帰ってきたが、朝・昼・晩の食卓は藤田宅の一同と一緒にであった。その食卓では、抑留所でのいろいろな経験を次から次へと話した。われわれは、眼を丸くしてそれをきいた。食卓をにぎわすものは、依然として乏しかったが、ミス・モークの話はつきるところを知らない楽しさであった。ミス・モークは、どんな苦しい経験でも、それを不平や悲壮さをもって語らず、過ぎ去った思い出として楽しそうに語った。これは彼女の楽観性というより、彼女のたくましい信仰的意志と新しい生産への意欲に燃えていたためである。まさに疲れを知らない紺碧の海潮である。それは太平洋の岸辺に生气を与えるあの黒潮のようだ。

ある日の抑留所での話はこうであった。

食料がだんだん、不足してきた。ことに新鮮なものがほしくなってきた。窓の外にはタンポポがたくさんある。あれをつんでくればよいのだ　それで家の外に出て、それをつんでいた。責任者がそれをみていた。たちまちきびしい声で言われた。

「外に出てはダメ」

「ああ、そうだった。ここは抑留所だ」

彼女はあきらめて家の中に入った。

しかし、あとで、叱った人はたくさんのたんぽぽを包みに入れてもってきて、彼女にいった。

「とってきてあげますよ、しかしほかの人に見つかるめんどろですからね」と。

これは小川賢三所長であった。

わたしたちは、ミス・モークにいった。

「たんぽぽが食べられますか」

「ええ、おいしいですよ」

「わたしたちも野草を食べましたが、先生も同じでしたね」



「神様は、いろいろなことを教えて下さいます。平時ではわからない、かずかずの恵みを」

たんぽぽの青い葉をボイルして食べることを、ミス・モークは幼い時から知っていたというが、今日宣教師にそれをきいてみると、  
(例えばミス・エルマーは)

「その話を聞いて驚きました。たんぽぽに栄養価があるということがわかったのは、比較的最近のことで、わたしたちの幼いころには食べませんでした。それなのにミス・モークが、その価値を知っていたというのは、全くすばらしいことです」

ということである。抑留所の模様を知るのも興味ある話であるが、こうしてミス・モークの博学ぶりも、われわれの心を捕えることであった。

われわれの食卓は乏しかったが、実に楽しい朝夕であった。そして食事の終わりには、英語で、「おいしい御馳走をありがとうございました。もう、十分、いただきました。」

と互いに言うことを学んだ。

“Thank you very much for the delicious meal. I have had more than enough.”

抑留所での話には、もっと、別な暗い面もあったようだ。しかし、ミス・モークは、そういう話は食卓では決してしなかった。そして子供たちの前では特に気をつけた。ミス・モークはそういった意味での良き教育者であった。...

米軍のチャプレンたちは、戦時中、日本にとどまり抑留所生活をしたアメリカの婦人、ミス・モークのことを非常な感動の眼をもって見た。ミス・モークのためなら、できることは何でもしたいというわけで、種々なる援助をした。日米間の民間的交流が何らできていないときなので、このチャプレンたちの援助は大きい力であった。しかし、ミス・モークという人は、それを独専する人ではない。集まって来る窮乏の人々に喜んでわかち、その喜ぶ姿を見て共に喜ん

だ。

ここで、ミス・モークと神学校の関係に移らなければならない。ここにもう一つ、ミス・モークの意志と生産の実例がある。

ミス・モークは、かねて、ミス・バーンファインドの創立した東京聖書学校復興のことを考えていた。東京聖經女学院の院長であった岡田五作ともおりおり相談をした。東京周辺駐在のチャプレンたちは会議して、神学校創立会議を開いたらどうかとやってきた。そして開かれた最初の会議は、高円寺のミス・モークのいる石館邸であった。...(昭和21年)5月9日午前10時より、淀橋区下落合1丁目500、旧メーヤー宅にて開校式を執行した。この神学校は、後日、チャプレンたちの手を離れて日本基督教団との関係に入り、その基礎を確立して今日に至っている。ミス・モークは、1953年、定年退職で帰国されるまで、理事として、また、教授として奉仕した。その間、学生の栄養失調をなくそうとして食料・薬品・その他の補給のため、あらゆる手をうった。衣料も欠乏していたので彼女は、男女学生のためこの点についても努力をおこたらなかった。神学校として長くその功績を覚えなくてはならないであろう。...

1946年4月15日、久しぶりで日本へ帰って来た二人の宣教師がある。その一人は、福音教会(米国では福音教会と同胞教会が合同して福音同胞教会=普通E・U・B教会と呼ばれる)のドクター・P・S・メーヤーであり、もう一人はカナダ合同教会のドクター・アーネスト・G・バットであった。...

ミス・モークは、いよいよ、一度、アメリカに帰ることとなった。6月16日の日曜に石館邸における小石川白山教会としての送別の礼拝をもった。87名の来会。...かくして6月28日、ミス・モークはアメリカへ向かって日本を発った。長い年月にわたる労苦を十分にいやしてまた帰ってこられるようにと、一同の感謝と希望をこめて送った。